

【研究ノート】

1850年代における米国の絵入り新聞にみられる日本記事 —ピーボディー・エセックス博物館所蔵の日本コレクションから—

小林 淳一*

目次

- 1 はじめに——描かれた大仏
- 2 アメリカとむすぶ長崎出島オランダ商館
- 3 ペリー日本遠征隊とシーボルト
- 4 絵入り新聞にみえる日本記事
- 5 ニュースソースはどこからか
- 6 アメリカにおけるシーボルトと川原慶賀
- 7 むすび

キーワード ペリー シーボルト 川原慶賀 『グリーンズン絵入り新聞』 『バロウ
絵入り新聞』 19世紀日米のイメージ形成 日米異文化理解

1 はじめに——描かれた大仏

あきらかに大仏とわかる絵ではあるが、さてこれは本当に日本であろうか、と一瞬おもった。「日本のミヤコ近くの寺」という説明書きが付されているにもかかわらずである(図1)。その頭上、天蓋のうえには鳳凰らしきものが^{あい}相対している。しかし、これは私たちに馴染みのある伝説上の「靈鳥」とはほど遠い。まるで、太古の昔の空飛ぶ恐竜のようにみえる。また、大仏の足元にはお立ち台らしきものの上で、シルエットなのか黒く描かれた人びとが踊る。向かって左側には焚き火と、そこからモウモウと立ちのぼる煙。どうやらこれは「護摩焚き」をあらわしているようだ。

おびただしい数の^{ひとがた}人型が、右側の棧敷のようなところに立ち並んでいる。よく見ると、煙に隠れた左側にもびっしりとある。さらにおびただしいのは、人型よりもそれぞれに付けられたバナナの房のような「手」だ。「千手観音」を意味しているのだろう。そして、なによりも荘厳であるべき大仏はしっかりと開眼していて、「^{せむい}施無畏」ならぬ、こちらに手をふりながら愛想よ

* 当館学芸員

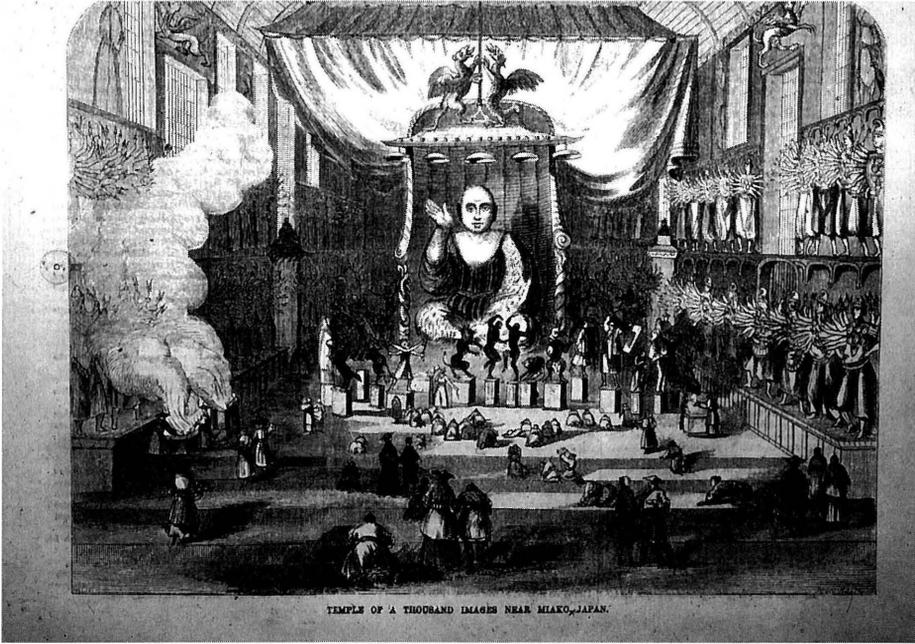


図1 「TEMPLE OF A THOUSAND IMAGES」『バロウ絵入り新聞』1856年5月3日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵

く挨拶をかわしているかのようだ。その前にひれ伏すあまたの人びと。はじめてこの絵をみた現代人ならば、ハリソン・フォード主演の冒険映画「インディ・ジョーンズ」の一場面を連想してしまうのではないだろうか。

米国ピーボディー・エセックス博物館が所蔵するこの絵は、1856年5月3日付、ボストンで発行された『バロウ絵入り新聞』に掲載となった日本に関する記事の挿絵である¹⁾。同館は全米最古の博物館といわれ、とりわけ日本とのかかわりにおいては、1877年（明治10年）に米国から来日したお雇い外国人エドワード・シルベスター・モースが収集した日本の民族資料のコレクションを所蔵することで名高い。それは一般に「モース・コレクション」とも称され、幕末から明治時代の初めにかけての日本人の生活の諸相を示す資料群においては、ヨーロッパに所在するシーボルト・コレクションとともに、在外日本コレクションとしての双璧をなす。

筆者はこのたびピーボディー・エセックス博物館にて「モース・コレクション」のほか、『バロウ絵入り新聞』や『グリーンズ絵入り新聞』をはじめ、1850年代に米国で発行された各種の新聞をも調査研究する機会をえた。

本稿ではこれらの絵入り新聞の一部と概要を紹介することによって、当時のアメリカ人たちは、鎖国下の「知られざる日本」をどのように理解しようとしたのか、いわば19世紀なかばのアメリカにおける日本という「異文化理解」の方法とそのプロセスの一端を考察することとする。

2 アメリカとむすぶ長崎出島オランダ商館

この大仏の記事の冒頭には次のような一文がある。「挿絵はヒル (Hill) 氏が描いたが、原画はオランダ人画家の手になるもので、ペリー提督が率いる日本遠征の際のメンバーによってもたらされた」。つまり、ヒルなる人物が来日して大仏やその回りの光景を直接スケッチしたのではなく、すでにオランダ人の画家が描いていた絵を写した。その原画はペリーの日本遠征隊員によって提供されたということである。ヒルという画家が原画を忠実にトレースしたのか、あるいはそれをヒントに想像をまじえたのか、いずれにしても新聞の掲載のために彼が銅版画として描きおこしたものであることが分かる。

アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが、捕鯨船および日本近海の船舶への便宜供与と、難破民の保護、薪炭・食料・水の供給などを要求して浦賀に来航したのは1853年(嘉永6)のことであった。翌年、再来日した彼は、条約締結をさらに強硬に迫り、幕府はその威力に屈服して、ついに日米和親条約を結んだ。そして、ここに200年以上にわたる日本の鎖国政策は、事実上くずれさることとなった。このときの遠征隊メンバーの誰かが、原画をアメリカ国内にもちこんだということになる。

ペリーの日本遠征の記録は、その後『ペリー艦隊日本遠征記』として1856年に米国議会より公刊されている。ペリーおよび乗組員たちの覚書や日記をペリー自身の監修のもとに、神学・法学博士フランシス・ホークスが編纂した。しかし、アメリカ側にとって、それ以前の日本に関する情報といえば、鎖国下にあつて交易を許されていたオランダ東インド会社を経由して、おもに長崎出島に滞在していた商館員らの見聞記によるものであつた。実際、ペリーは日本遠征にあつて、あらかじめそれらの情報を可能な限り入手していた。ケンペル、トゥンベリー、ティツィング、ドゥーフ、フィッシャー、メイラン、そしてシーボルトなど、オランダ商館関係者の日本における記録について、『日本遠征記』には次のような記述がある。

彼らはみな出島の商館関係者であり、当然のことながら警戒され、監視されていた。長崎の町を離れて見聞する唯一の機会、定期的に行われる幕府への見参の際にかろうじて与えられるだけであつた。先にあげたケンペルは、その範囲内で一ヨーロッパ人が知り得る情報をすべて記録していたため、後任者たちが新たに付け加えるべきことはほとんどなかった。³⁾

ペリーにとっては、出島オランダ商館員たちのなかでも、商館付医官であつたケンペルの書き記した情報が有用であつたとしている。とくに1691年(元禄4)、および1692年の2度にわたる長崎から江戸への参府の際の見聞を評価していた。ケンペルは、『廻国奇観』『日本誌』という2冊の著書を残しているが、このうち江戸参府の紀行をふくむ『日本誌』が発行されたのは、彼の死後、1727年のことであつた。ペリーが来日するおよそ130年も前のことである。ケンペルのこの17世紀末日本の状況を記した書物を、19世紀なかば、つまり1世紀半を経たのちにも、ア

アメリカの日本遠征隊が重宝していたことがうかがえる。

しかし、さらに注目すべきは、1823年（文政6）から7年間にわたり、ケンペルと同じく長崎出島にオランダ商館付医官として滞在したシーボルトである。彼はその間、出島での制約のあった生活にもかかわらず日本に関する総合的な研究をおこなった。それは、医学をはじめ、ヨーロッパの最先端の近代科学を日本に移入する一方、文献や美術工芸品から生活用具にいたるまで、膨大、かつさまざまな日本の文物を収集し持ち帰ったことにもあらわれている。

3 ペリー日本遠征隊とシーボルト

その成果は、帰国後、『日本』という大著にまとめられた。『日本遠征記』にはペリーがシーボルトについて、とくに注目していたことを示す次の記述がみられる。

ただ、ひとりの例外はシーボルトである。彼は目新しい事実や資料を集め、その観察と調査の結果を『ニッポン—日本記録集成 (Nippon, Archiv sur Beschreibung von Japan)』という著書にまとめ、世に出した。したがって、今日の文明諸国が日本についての知識をまったく欠いているというのは誤りであるが、それでも知られていることよりも知られていないことの方がはるかに多いというのが実情だろう⁴⁾。

シーボルトは鎖国体制の日本に対し「平和的開国論者」として知られるが、武力を背後に開国交渉を行おうとしたペリーとは奇しくも同時代人であった。そして、ペリーはシーボルトの収集した日本地図や、その著書『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』などを日本遠征の準備にあたり事前に購入し活用していた。

反対に、アメリカの日本への政治的動向を察知したシーボルトが、遠征隊への参画を熱望したにもかかわらず、ペリーによって拒否されたということは、これまでも何人かの研究者によって指摘されてきたところである。しかし、具体的にシーボルトが遠征隊の誰と、どのような接触をもったのが不明のまま、たとえば「ミシシッピー艦上の友人」と示唆するにとどまっていた⁵⁾。

さらに、『日本遠征記』においても、遠征隊員のなかにシーボルトとの直接の交信者がいたという記述がみられ、シーボルトからその人物あてへの手紙の抜粋を紹介しつつも、同じように「ミシシッピー号上のわが通信者」と表現するのみで、氏名や役職などの詳細は明らかにされていない⁶⁾。

さて、このようななか、シーボルトの末裔にあたるドイツのブランデンシュタイン・ツェッペリン家が所蔵する文書から、ペリーの日本遠征隊において2人の隊員がシーボルトと交信をもっていたことが最近になって分かってきた。その2人とは、遠征に同行した画家のウィルヘルム・ハイネと、同じくニューヨーク・トリビューン誌特派員のベイヤード・テラーである。彼らのやりとりは、「日本の学術的な調査」と「日本との外交交渉の情報」に大別できるという。

まず前者は、ペリーの率いる遠征隊には学識経験者の同行が許されておらず、遠征を記録する役割のハイネやテラーにあっては、いかにして日本での観察調査を有効にしえるか、シーボルトの教示を求めることにあつた。両者の要望は、アメリカ艦隊が来日した際に必要な日本人、および日本に滞在しているオランダ人の情報提供者をえることでもあつた。これに対し、シーボルトは元商館員のビクや、また1826年(文政9)、商館長シュトゥーラーとともに果たした江戸参府に、書記として同行したバタビア在住のビュルガーを紹介した。

後者については、シーボルトはペリーの武力を背景にした開国交渉はおそらく成功しないと考えていた。むしろペリーが武力を行使しないようにハイネをとおして働きかけていた。もともとシーボルトの開国構想は、日本を世界の貿易網に組み込み、西洋の科学技術を導入することによって近代化が行われることで成し遂げられる、というものであつた。

具対的な方策として、当時、行きづまりを見せていたロシアの東シベリア開発に必要な食糧、生活必需品の供給を日本に求めること、またそこからの産物の有望な市場として日本を捉えること。つまり、ロシアと日本との貿易関係を結ばせることにこそあつた。みづからの開国案がアメリカ側で受け入れられないことをハイネからの書簡で知つたシーボルトだが、本来、ペリーの対日交渉の手法とは相容れない内容であつた。以上、ブランデンシュタイン・ツェッペリン家文書による新たな事実を要約したが、アメリカの日本開国をめぐる未詳の部分にさらに光があてられたといえよう。

このように、ペリーは日本遠征の目的を達成するため、オランダ商館員たちの記録はつぶさに調べあげ、任務遂行にあたって周到な準備をかさねてきた。いわばヨーロッパ経由で可能な限り日本に関する知識はキャッチしていたのである。とくにシーボルトとの関わりにおいては、それまでの彼の「研究成果」を「研究」しつくし、かつハイネやテラーを介して日本情報の取得を直接はかつていた。

〈中略〉この特異な民族(日本人)が張り巡らしていた防壁をついに打ち砕き、われわれが望んでいるように、日本を世界の貿易国の一員として招き入れるための第一歩となる友好通商条約締結をこの時代においてまっ先に実現させる役割は、最も若い国であるわが合衆国に残されていたのだつた。日本の壁を打ち砕き、その門戸を世界へ開くという役割が、合衆国にとってかならずしも不適任だとは思えないということをここに付言してもよいのではないだろうか。⁸⁾

ここに「最も若い国」たるアメリカこそが、かつてヨーロッパ諸国が果たしえなかつた日本開国をおこなうに適任だとの自負と決意があらわれている。

4 絵入り新聞にみえる日本記事

国家プロジェクトとして遂行されたペリーの日本遠征ではあるが、一方でアメリカの大衆は

この事態をどのように受けとめていたのであろうか。また、その時代の彼らの「日本観」とは、いかなるものであったのだろうか。1850年代にボストンで発行された絵入り新聞から、その内容を見てみよう。ここに紹介するのは、『グリーンズ絵入り新聞』と『バロウ絵入り新聞』である。

『グリーンズ絵入り新聞』は、1851年5月3日の創刊になる(図2)。発行人はF.グリーンズ(図3)、編集人はM.M.バロウ(図4)、という人物で、社屋はボストンのトゥリーモント通りにあった(図5)。1851年5月3日から54年末までは、グリーンズが発行人をつとめていたが、55年になるとそれまで編集人であったバロウがその座にとってかわる。名称も『バロウ絵入り新聞』となり、58年末まで続刊されることとなった。

毎週土曜日に発行され、1部10セント。年間をとおすと3ドルの割引料金であった。1853年2月12日付の同紙には、発行の趣旨をはじめ、この新聞のセールスポイントが社告のかたちで次のように記されている。



図2 『グリーンズ絵入り新聞』創刊号
1851年5月3日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵



図3 「発行人F.グリーンズ」『グリーンズ絵入り新聞』1852年1月3日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵

本紙の目的は、日々のめずらしい出来事を、毎週、もっとも上品にして有益な紙面をもって提供することにある。そのコラムはアメリカにおける最良の執筆陣によって独自の記事、挿絵、詩歌としてご覧いただける。国内および国外のニュースの粋はウィットとユーモア⁹⁾で味付けする。

紙面の体裁は、文章と銅版画をつかった挿絵から成り、毎号16ページの構成であった。クリスマスとか感謝祭などの年中行事や、季節の節目には歳時記的な読み物も用意され、また地域の情報として結婚や物故のお知らせコーナーもあった。国外情報は豊富で、のちに示すように日本に関する記事はペリーの日本遠征を前後に頻繁に登場するようになる。ニューヨーク・フィラデルフィア・ボルチモア・シンシナティ・デトロイト、そしてセントルイスの各地に代理店があり、ボストン以外のそれらの都市でも購読することができた。なお、毎号の発行部数は約2万部であった。

ここで、『グリーンズン絵入り新聞』と『バロウ絵入り新聞』に掲載された日本に関する記事の全体を概観してみたい。表1は1851年5月から58年末までの7年8カ月間、つまり両紙の創刊



図4 「編集人M.M.バロウ」『グリーンズン絵入り新聞』1852年1月3日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵

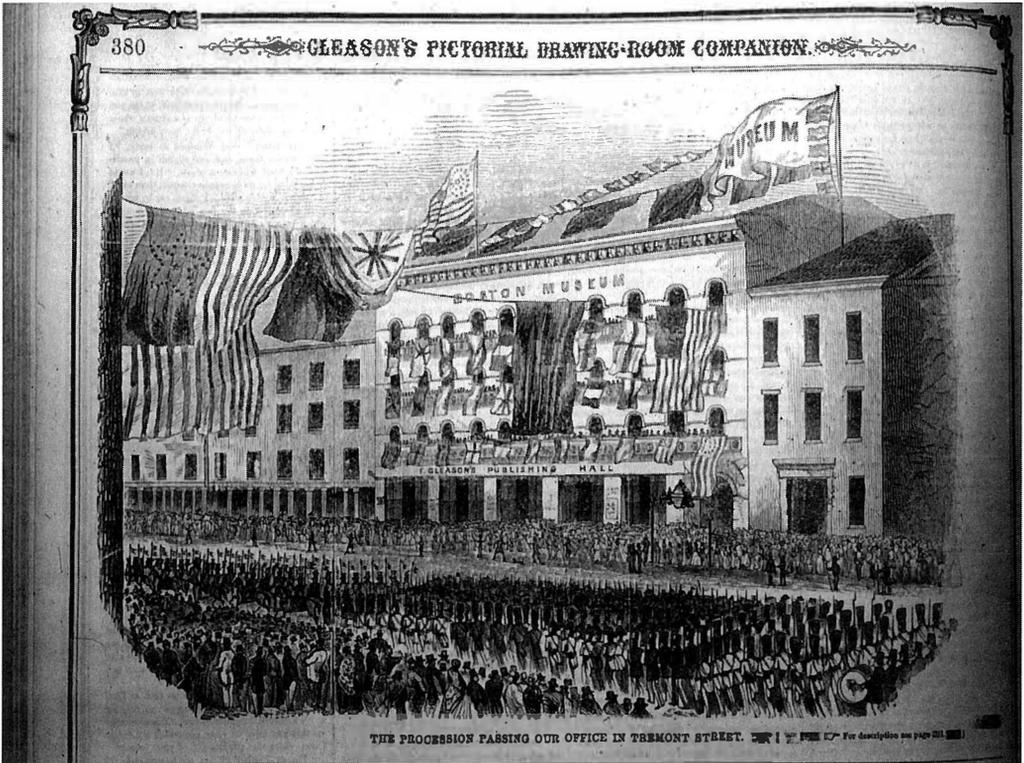


図5 「グリーン社・社屋」『グリーン絵入り新聞』1851年10月11日
ピーボディ・エセックス博物館蔵

から廃刊までの時期における日本記事の全リストで、記事の内容についてはその見出しを掲出してある。

記事の全体から把握できる潮流は、大きく2つに分けられよう。第1は、アメリカの、国家としての日本への「政治的野心」である。ヨーロッパ各国から遅れをとって日本との関係を築こうとした新生国家アメリカの目的は、大統領フィルモアの国書を携えていったペリーの日本遠征をとおして具現化されてゆく。日本記事の初出は1852年5月15日付の一面トップをかざった「JAPANESE SQUADRON」と題するもので、挿絵はミシシッピー号を旗艦とし大海原を遊弋するペリー艦隊7隻の「勇姿」であった(図6)。浦賀沖に黒船として威容を見せる1年2カ月ほど前には、この「エクスペディション」(探検)はすでにアメリカの読者に紹介されていたのである。日本との外交関係については、この記事をかわぎりに、ペリーの米本土出発から日本の開港にいたるまでを刻々と、時事的もしくは解説的に掲載している。

そして第2は、鎖国下の「知られざる日本」「奇妙な日本」への好奇心である。

日本という帝国は、昔からあらゆる面で有識者の並々ならぬ関心の的となってきた。加えて、200年来の鎖国政策がこの珍しい国の社会制度を神秘のヴェールでおおい隠そうとした結

表1 『グリーンズン絵入り新聞』『パロウ絵入り新聞』の日本関係記事

【GLEASON'S PICTORIL】				
MAY. 15, 1852	VOL. 2	NO. 20	WHOLE NO.-	PAGE.305
*VIEW OF THE VESSELS COMPOSING THE JAPANESE SQUADRON, SUSQUEHANNAH, SARATOGA, ST. MARY'S, SUPPLY, PLYMOUTH, (PERRY), MISSISSIPPI, PRINCETON.				
MAY. 15, 1852	VOL. 2	NO. 20	WHOLE NO.-	PAGE.320
*STEAMER MISSISSIPPI, FLAGSHIP OF THE JAPANESE EXPEDITION.				
JUL. 3, 1852	VOL. 3	NO. 1	WHOLE NO.53	PAGE.8-9
*CUSTOMS AND COSTUMES OF JAPAN.				

FEB. 12, 1853	VOL. 4	NO. 7	WHOLE NO.85	PAGE.104
*A SUPERB VIEW OF THE UNITED STATES JAPANESE SQUADRON.				
FEB. 12, 1853	VOL. 4	NO. 7	WHOLE NO.85	PAGE.105
*UNDER COMMAND OF COMMODORE PERRY, BOUND FOR THE WEST.				
FEB. 12, 1853	VOL. 4	NO. 7	WHOLE NO.85	PAGE.109
*THE JAPAN EXPEDITION.				
APR. 9, 1853	VOL. 4	NO. 15	WHOLE NO.93	PAGE.233
*JAPANESE CUSTOMS AND CEREMONIES.				
APR. 9, 1853	VOL. 4	NO. 15	WHOLE NO.93	PAGE.238
*JAPAN AND THE JAPANESE. BY BEN:PERLEY POORE.				
APR. 23, 1853	VOL. 4	NO. 17	WHOLE NO.95	PAGE.257
*THE EMPEROR OF JAPAN GIVING AUDIENCE.				
OCT. 15, 1853	VOL. 5	NO. 16	WHOLE NO.120	PAGE.256
*JAPANESE SCENES. CONGOXUMA.				
DEC. 3, 1853	VOL. 5	NO. 23	WHOLE NO.127	PAGE.368
*SACCAI, JAPAN.				

JAN. 14, 1854	VOL. 6	NO. 2	WHOLE NO.132	PAGE.24-25
*A REPRESENTATION FLAGS OF ALL NATIONS.				
JAN. 14, 1854	VOL. 6	NO. 2	WHOLE NO.132	PAGE.29
*THE FLAG OF ALL NATIONS.				
JAN. 21, 1854	VOL. 6	NO. 3	WHOLE NO.133	PAGE.40-41
*NATIONAL COSTUMES OF ALL THE NATIONS ON THE GLOBE.				
JUN. 24, 1854	VOL. 6	NO. 25	WHOLE NO.155	PAGE.392-393
*SCENES IN JAPAN.				
FEB. 25, 1854	VOL. 6	NO. 8	WHOLE NO.138	PAGE.120-121
*SCENES IN JAPAN.				
JUL. 1, 1854	VOL. 6	NO. 26	WHOLE NO.156	PAGE.413
*A RAMBLE IN JAPAN.				
JUL. 8, 1854	VOL. 7	NO. 1	WHOLE NO.157	PAGE.14
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO.1) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
JUL. 15, 1854	VOL. 7	NO. 2	WHOLE NO.158	PAGE.30
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO.2) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
JUL. 22, 1854	VOL. 7	NO. 3	WHOLE NO.159	PAGE.33
*MOUNT OF PLEASURE, JAPAN.				
JUL. 22, 1854	VOL. 7	NO. 3	WHOLE NO.159	PAGE.40
*JEDO, CAPITAL OF JAPAN.				
JUL. 22, 1854	VOL. 7	NO. 3	WHOLE NO.159	PAGE.41
*JEDO, CAPITAL OF JAPAN.				
JUL. 22, 1854	VOL. 7	NO. 3	WHOLE NO.159	PAGE.46
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 3) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
JUL. 29, 1854	VOL. 7	NO. 4	WHOLE NO.160	PAGE.62
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 4) BY REV. LUTHER FARNHAM.				

AUG. 5, 1854	VOL. 7	NO. 5	WHOLE NO.161	PAGE.68
*COMMODORE PERRY.				
AUG. 5, 1854	VOL. 7	NO. 5	WHOLE NO.161	PAGE.78
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 5) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
AUG. 12, 1854	VOL. 7	NO. 6	WHOLE NO.162	PAGE.94
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 6) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
AUG. 19, 1854	VOL. 7	NO. 7	WHOLE NO.163	PAGE.110
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 7) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
AUG. 26, 1854	VOL. 7	NO. 8	WHOLE NO.164	PAGE.126
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 8) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
SEP. 2, 1854	VOL. 7	NO. 9	WHOLE NO.165	PAGE.142
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO. 9) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
SEP. 9, 1854	VOL. 7	NO. 10	WHOLE NO.166	PAGE.158
*JAPAN AND THE JAPANESE (NO.10) BY REV. LUTHER FARNHAM.				
SEP. 9, 1854	VOL. 7	NO. 10	WHOLE NO.166	PAGE.159
*JAPAN PORTS OPENED.				
SEP. 16, 1854	VOL. 7	NO. 11	WHOLE NO.167	PAGE.168-169
*JAPANESE SCENES.				
DEC. 2, 1854	VOL. 7	NO. 22	WHOLE NO.178	PAGE.251
*THE BIBLE IN JAPAN.				
 [BALLOU'S PICTORIL] —————				
APR. 28, 1855	VOL. 8	NO. 17	WHOLE NO.199	PAGE.260-261
*JAPANESE SCENES.				
DEC. 1, 1855	VOL. 9	NO. 22	WHOLE NO.230	PAGE.340
*WHALE FISHERY OF THE COAST OF JAPAN.				

APR. 12, 1856	VOL. 10	NO. 15	WHOLE NO.249	PAGE.240
*JAPANESE SKETCHES.				
MAY. 3, 1856	VOL. 10	NO. 18	WHOLE NO.252	PAGE.273
*TEMPLE OF A THOUSAND IMAGES.				
MAY. 10, 1856	VOL. 10	NO. 19	WHOLE NO.253	PAGE.296-297
*JAPANESE SCENES.				
MAY. 17, 1856	VOL. 10	NO. 20	WHOLE NO.254	PAGE.320
*JAPANESE CURIOSITIES-CASCADE IN ICELAND.				
AUG. 30, 1856	VOL. 9	NO. 9	WHOLE NO.269	PAGE.144
*SKETCHES IN JAPAN.				

APR. 25, 1857	VOL. 12	NO. 17	WHOLE NO.305	PAGE.272
*JAPANESE DIGNITARIES.				
MAY. 30, 1857	VOL. 12	NO. 22	WHOLE NO.310	PAGE.310
*THE STEAM YACHT "EMPEROE".				
MAY. 30, 1857	VOL. 12	NO. 22	WHOLE NO.310	PAGE.341
*JAPANESE WRESTLERS.				
JUN. 13, 1857	VOL. 12	NO. 24	WHOLE NO.312	PAGE.372-373
*AFRICANS AND ASIATICS.				
MAR. 20, 1858	VOL. 14	NO. 12	WHOLE NO.352	PAGE.181
*VIEW OF EDO, THE IMPERIAL CITY OF JAPAN.				

〈上記の*は、「見出し」をあらわす〉

果、日本への関心はかえってますます高まった。そのため、キリスト教国の日本に対する好奇心ははまだ衰えることを知らず、さまざまな分野の熱心な研究者たちの中には、当然、この自ら孤立を選んだ国についての知識を少しでも増したいと切に願う人々がある¹⁰⁾。

ここに引用したのは、ふたたび『日本遠征記』の冒頭部分である。米国議会から刊行されたペリーの公式報告書にもこのような日本への好奇のまなざしが表明されていた。

その風潮は両紙の記事にもことごとくあらわれ、「日本の習慣と服装」「日本の習慣と儀式」といった生活様式にかかわるものから、「日本の風景」「日本の首都・江戸」「日本沿岸の捕鯨」など、地誌や産業にいたるまでを網羅している。

5 ニュースソースはどこからか

1850年代の日本とアメリカにおける異文化理解の観点からこれらの記事を読みとろうとするとき、もっとも関心が示されることは、記事や挿絵の「ニュースソース」とその成立過程である。たとえば、1854年9月16日付の『グリーンズ絵入り新聞』では、やはり見開き2ページ分の全部をついやし、「JAPANESE SCENES」と題する見出しを掲げ、4カットの挿絵とともに日本の地理や風俗を紹介している（図7・8）。挿絵の考察に入る前に、まず記事の冒頭部分を



図6 『『グリーンズ絵入り新聞』
1852年5月15日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵

原文から引用してみよう。

It is well known that the empire proper of Japan comprises three large islands
—Kiusiu, Sitkorf, and Niphon.

これを原文のとおりに翻訳すると次のような内容になる。

日本帝国(Japan)の本土が、3つの大きな島から成ることはよく知られている。すなわち、九州、四国、日本(Niphon)である。(傍点は筆者)

現代の私たちから見れば、「本州」というべきところを、ここでは「Niphon」としている。つまり、この記事を書いた人物は、日本国を「Japan」、本州を「Niphon」と解釈していたことになる。前述のシーボルトはその著書『日本』で、「日本国の名称」について次のように言及している。

日本はその住民たちにニッポン Nippon あるいはニフォン Niffon と呼ばれている。ニチ Nitsi あるいはニツ Nitsu は太陽を意味し、ホン Hon あるいはフォン Fon は源を意味している。この二つが合成されると発音の変化法則によってニッポン・ニホンという名称が生じる。それはすなわち日の出を意味する。<中略>ニッポンという名称は、また日本列島最



図7 『グリーンズ絵入り新聞』
1854年9月16日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵

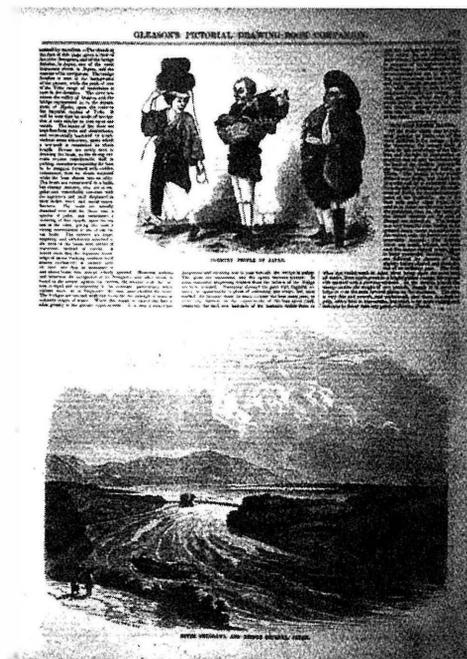


図8 『グリーンズ絵入り新聞』
1854年9月16日
ピーボディー・エセックス博物館所蔵

大の島のことである。そしてヤマトとはこの本州のなかで、天皇（世襲の皇帝）の古代宮廷都市があった地方のことである。日本の領土の全体は日本人によって大日本つまり偉大なる日本と呼ばれている¹¹⁾。

このようにシーボルトは、ニッポンという名称には「日本列島最大の島」である「本州」、ならびに「日本国」の両方の意味があると説明している。また日本人は、日本の領土全体を「大日本」と呼ぶとも述べている。彼の著書『日本』に図版として収録された「日本とその隣国および保護国——日本の原地図による」（図9）という地図をみると、九州・四国・本州は、それぞれ「KIUSIU」「SIKOK」「NIPPON」と記されている。ただし、全体の名称は「JAPAN」とある（ちなみに、「日本海」は「Japansche Zee」だ）。

この地図のもともとの原図は、1823年（文政5）、江戸の天文方・高橋作左衛門が日本の地図をはじめ、中国・朝鮮、それにロシアや古いポルトガルの地図を参照にして制作し、さらに亜欧堂田善が銅版にしたものである¹²⁾。1826年（文政9）、シーボルトは將軍謁見のため参府の際、江戸に滞在中、原図そのものを高橋から直接受けとった。そして、帰国後、それを下敷きに図9を作成し、著書『日本』の図版とした。「日本の地理とその発見史」のなかでは、掲載にいたるまでの経緯を次のように解説している。

本図は、もとは日本語の地図の忠実な略図である。しかし、日本・蝦夷・樺太・琉球諸島に関しての名称の訳あたっては、いくつかの日本の別の地図と比較しながら作業をすすめた¹³⁾。

注目すべきは「名称の訳」のところである。ほかの地図と比較しながら、シーボルトが訳したとある。つまり、図9にみられる「KIUSIU」「SIKOK」「NIPPON」などの名称は、彼自身の訳出であったことがわかる。

さらに、著書『日本』には、「日本国——日本の最も主要な島嶼。その八つの地方と六十八の国。隣国ならびに保護国」（図10）という一覧表も収録されており、やはりシーボルト自身が「日本の地理とその発見史」のなかで次のように解説している。

ここ数世紀の間、いろいろと名称が誤り伝えられ、日本とその付近の地理学はいちじるしくゆがめられてきたし、再版を重ねるたびに、またそれに当たる文字を新たに翻訳するたびに、新たな歪曲が生じてきた。こういう誤った名称をすっきり除去し、日本字に沿い、言語の基礎的法則によって真の名を確定することは、私にとって緊急の仕事であるように思われる。これは一覧表によるのが一番便利であろう¹⁴⁾。

図10をみると「日本の最も主要な島嶼」のうち、一覧表の最上段には「日本」「九州」「四国」とあり、ここでの「日本」は本州を意味していることがわかる。また、日本国全体は標記にあるとおり「大日本」である。「日本の呼称」をめぐることは、これまでみてきたように1854年9月16日付『グリーンズン絵入り新聞』の記事と、著書『日本』におけるシーボルトの解説とは同一であったことが分かる。

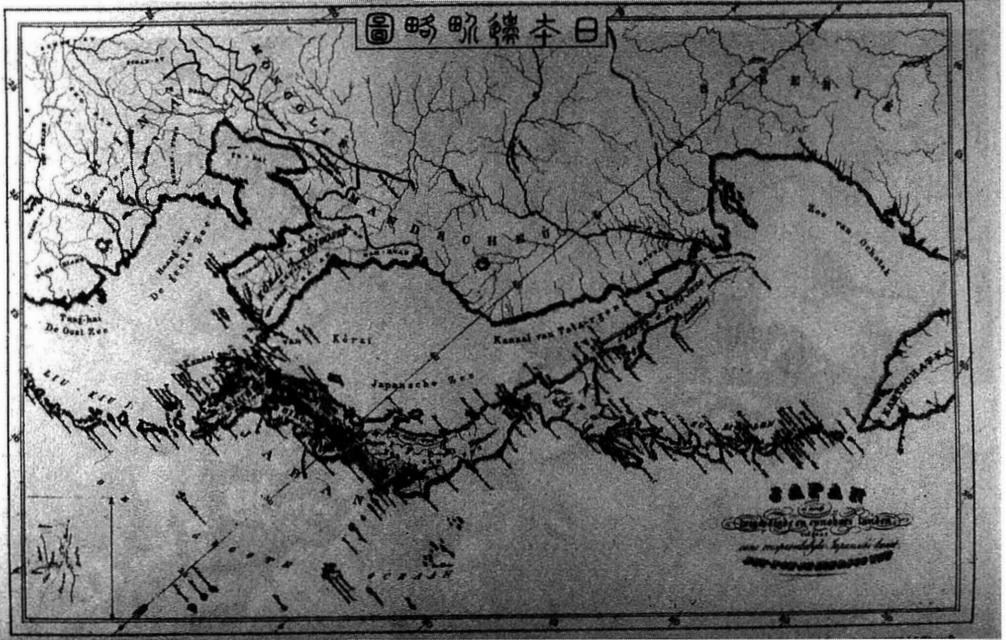


図9 「日本とその隣国および保護国——日本の原地図による」シーボルト著『日本』、雄松堂書店刊

DEET JAPANESE RYK
本 日 大
DAI NIP-PON

DE VOORNAAMSTE EILANDEN 國ノ四ノ州ノ九ノ本ノ日ノ VAN HETZELVE ZIJN

H. EL.		KOK.		K. KIU.		SIU.		I. NIP.		FON.	
戸ノ平	草ノ天	島ノ五	島ノ八	島ノ大	島ノ聖	岐ノ隱	岐ノ壹	島ノ種	路ノ淡	渡ノ佐	馬ノ對
H. Ura	H. Ama	H. Oki	H. Izu	H. Kjusiu	H. Kjusiu	H. Oki	H. Iki	H. Tsushima	H. Awata	H. Suo	H. Tsushima
<i>Geen naam hebben in alle of in eenige Landschappen.</i>											
河ノ三	張ノ尾	庫ノ志	勢ノ伊	賀ノ伊	道ノ濱	津ノ攝	泉ノ和	内ノ河	和ノ大	城ノ山	内ノ舞
H. Sagami	H. Ise	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise	H. Echigo	H. Suruga	H. Echigo
江ノ近	道ノ山	陸ノ雲	越ノ下	越ノ上	身ノ安	藏ノ武	播ノ相	豆ノ伊	笑ノ甲	河ノ駿	江ノ遠
H. Sagami	H. Fudzu	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise	H. Echigo	H. Suruga	H. Echigo
張ノ龍	賀ノ加	前ノ越	秩ノ若	道ノ濱	羽ノ出	真ノ陸	野ノ下	野ノ上	波ノ信	保ノ若	波ノ美
H. Sagami	H. Ise	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise	H. Echigo	H. Suruga	H. Echigo
岐ノ隱	見ノ石	雲ノ出	看ノ伯	播ノ國	馬ノ但	後ノ丹	波ノ丹	道ノ山	波ノ佐	後ノ越	中ノ越
H. Iki	H. Oki	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise	H. Echigo	H. Suruga	H. Echigo
路ノ淡	伊ノ紀	道ノ濱	門ノ長	防ノ周	藝ノ守	後ノ備	中ノ備	前ノ備	作ノ美	看ノ播	道ノ陽
H. Tsushima	H. Ise	H. Fudzu	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise	H. Suruga	H. Echigo
向ノ北	後ノ北	前ノ北	後ノ北	前ノ北	前ノ北	前ノ北	道ノ西	後ノ土	環ノ伊	岐ノ關	波ノ阿
H. Sagami	H. Ise	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise	H. Echigo	H. Suruga	H. Echigo
I. TOBATAKI											
真ノ海	球ノ波	島ノ對	岐ノ隱	庫ノ志	網ノ大	夷ノ蝦	北ノ比	夷ノ蝦			
H. Sagami	H. Ise	H. Mino	H. Suruga	H. Echigo	H. Fudzu	H. Mutsu	H. Suruga	H. Ise			

図10 「日本国——日本の最も主要な島嶼。その八つの地方と六十八の国。隣国ならびに保護国」シーボルト著『日本』、雄松堂書店刊

ところで、はじめて日本が西洋で紹介されたのは、いつごろにさかのぼるのだろうか。周知のように、1254年、ベニスに生まれ、71年から95年までアジア諸国を旅したマルコ・ポーロが、その見聞を口述のうえ、まとめられた書物『東方見聞録』（1485年刊行）には「黄金の島・ジパング」が登場する。1606年のイタリア語版のそれでは、日本の呼称を「Zipangu」としている。また、1744年の英語版は「Zipangu, i. e. Japan」。つまり、「ジパング、言いかえればジャパ¹⁵⁾ン」と、ことわりながらもすでに「Japan」という呼称を使っていたのである。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』に刺激を受け、そこに記された「黄金の国」への到達を夢見て船出をしたコロンブスは、1492年、「新大陸を発見」した。そして、その地の末裔たちにあたる『グリーンズン絵入り新聞』の執筆者にとって、「Nippon」とは本州を意味していた。そこに、19世紀中ごろにおけるアメリカ人の日本観の一端が見えてくるのだが、むしろシーボルトの研究成果『日本』をニュースソースとし、それにならったからであろうと推測される。

ここまで、長々とシーボルトを引き合いに出してきたのは、この記事、つまり前掲の『グリーンズン絵入り新聞』の「JAPANESE SCENES」（図7・8）にみえる挿絵4カットは、日本の地理や風俗を文章にあわせてビジュアルで紹介したものだが、実はそのすべてが彼の著書『日本』からの引き写しである、ということが判明したからである。

6 アメリカにおけるシーボルトと川原慶賀

図11はそれらのうちの1カットで、見開き両ページのうち右側（図8）の上部にレイアウトされている。男性2人と女性1人、計3人の人物がならび、キャプションには「COUNTRY PEOPLE OF JAPAN」とある。『グリーンズン絵入り新聞』に掲載されたこの挿絵が、シーボルト著『日本』の図版の「農民」（図12）と一致する。つまり、この挿絵のニュースソースは、シーボルトの著作物からの引き写しであったのである。

さきにも述べたように、シーボルトは1823年（文政6）から7年間にわたり長崎出島のオランダ商館に医官として滞在のうえ、鎖国下の日本を総合的に研究した。帰国後にまとめた大著『日本』は、現代でもヨーロッパの日本学（ジャパノロジー）における不朽の名著とされる。その際、シーボルトは日本および日本人を紹介するにあたり視覚的な効果をはかるべく、長崎の町絵師・川原慶賀に多くの絵を描かせた。

通称を登与助^{とよすけ}ともいった川原慶賀は出島出入りの絵師として知られ、1826年（文政9）のオランダ使節の江戸参府には長崎から江戸への旅をともにした。シーボルトは、道中、たとえば関門海峡や下関など、軍事的あるいは産業的要衝の見取り図や景観などを慶賀にスケッチさせ、みずからの眼のごとく縦横無尽につかっていたことが、次に示す彼の紀行文からうかがえる。

彼（慶賀）は長崎出身の非常にすぐれた芸術家で、とくに植物の写生に特異な腕をもち、人物画や風景画にもすでにヨーロッパの手法をとり入れはじめていた。彼が描いたたくさ



図11 「COUNTRY PEOPLE OF JAPAN」『グリーンズン絵入り新聞』
1854年9月16日 ピーボディー・エセックス博物館所蔵

んの絵は私の著作の中で彼の功績が真実であることを物語っている。¹⁶⁾

図11および図12の3人の人物は、その慶賀が描いたものだ。

慶賀の絵で、近年、とくに注目されるものは、ミュンヘン国立民族学博物館が所蔵する『人物画帳』である。そこには、さまざまな日本人が109人にわたり1人ずつ克明に描かれ、いわば「江戸時代の日本のゆたかな民衆世界」といった観を呈している。紙本着彩により、1冊の画帳としてとじられたこれらの絵は、美術作品のみならず、民俗学的な見地からしても近世の日本における貴重な資料と位置づけられる。シーボルトは、この109人から18人を選び石版画におこしたうえ著書『日本』に掲載した。そして、そのうちの3人が「農民」の挿絵としてつかわれたこととなる。¹⁷⁾

つまり、『グリーンズン絵入り新聞』に掲載された人物(図11)は、シーボルト著『日本』の挿絵「農民」(図12)からの引用であり、もとをたどれば慶賀筆『人物画帳』に収められた109人のうちの3人に行きつく。このプロセスを時系列に整理すると次のようになる。

- ①川原慶賀は、シーボルトの滞日中(1823~1830)、彼のために日本人109人の水彩画(『人物画帳』)を描いた。
- ②シーボルトは、帰国後、著書『日本』を刊行するにあたり、『人物画帳』から18人の人物を選び、石版画にして同書の挿絵につかった。



図12 「農民」シーボルト著『日本』、雄松堂書店刊

③シーボルトは、その18人のうち3人を「農民」の挿絵としてつけた。

④『グリーンズン絵入り新聞』の編集者は、シーボルト著『日本』から「農民」の挿絵を銅版画にして、同紙の記事につかった。

『グリーンズン絵入り新聞』の挿絵の3人は、慶賀筆『人物画帳』には図13・14・15として収められている。1枚ずつの余白に記されている説明書きによると、図14は^{みのかさすぎた}蓑笠姿で踏鋤をもち、^{あみすき}頬杖をついて立つ「農夫」。図14も「農夫」で、天秤の両端に徳利・風呂敷包み・花ござ・反物などの荷がのぞく。さらに、図15には「薪売りの農婦」とあるが、木綿紘に手甲、脚絆のいでたちで、京都近郊の大原から薪炭などを頭上にのせ売りにくる「^{おほらめ}大原女」を¹⁸⁾あらわす。

ペリーが浦賀に来航したのは1853年、日米和親条約は翌年に締結された。『グリーンズン絵入り新聞』がこの記事を掲載したのは、まさにその年、1854年の9月16日のことである。アメリカが日本の長い間の鎖国体制を打ち破り、開国を果たしたという情報が国際的なニュースとなって世界をかけめぐるなか、日本人の生活の諸相はシーボルト著『日本』の挿絵から——いいかえれば、慶賀がシーボルトのために描いた人物画によって、ビジュアルにアメリカの大衆へと提供されたのであった。

さて、図11以外の3カットについても、やはり『グリーンズン絵入り新聞』はシーボルト著『日

本』からそのまま引き写している。見開き両ページの右側（図8）の下部にレイアウトされた図16の挿絵をみてみよう。「RIVER SETAGAWA AND BRIDGE SETABAS, JAPAN」というキャプションがあり、「瀬田川と瀬田橋」の風景が描かれる。これはシーボルト著『日本』に掲載された図17からの引用だ。シーボルト一行は江戸参府の際の往路、1826年3月25日に京都から大津をへて瀬田川をわたっているの、この原画も随行した慶賀の筆によるものと考えられる。

また、見開き両ページの左側（図7）の下部にレイアウトされた図18の挿絵には手漕ぎ船や帆船など3艘の「和船」が見られる。シーボルト著『日本』の挿絵は図19のとおりで、和船の一部分である^{かじ}舵をふくめ6点ある。『グリーンズン絵入り新聞』は、ここからおもなものを3点を選んで記事に掲載した。両方とも「商船」（シーボルトによると「Akinai fune」）を大きくあつかっているが、^{いかり}錨のところに注目したい。おもしろいことに『日本』では向かって左方向に描かれているが、『グリーンズン絵入り新聞』ではその逆の右方向、絵の構図からいえば内側におさめられている。おそらくは、紙面上の制約とレイアウトのためであろう。この挿絵の出典は今のところ確認できていないものの、ライデン国立民族学博物館が収蔵するシーボルト・コレクションには精巧な和船の縮小模型が多数あるので、オランダ人の石版画家がそれらを模写して『日本』に掲載したとも考えられる。



図13 「踏鋤をもつ農夫」
川原慶賀筆『人物画帳』
ミュンヘン国立民族学博物館所蔵



図14 「天秤をもつ農夫」
川原慶賀筆『人物画帳』
ミュンヘン国立民族学博物館所蔵



図15 「大原女」川原慶賀筆『人物画帳』
ミュンヘン国立民族学博物館所蔵



図16 「RIVER SETAGAWA AND SETABAS JAPAN」
『グリーンズン絵入り新聞』
1854年9月16日 ピーボディー・エセックス博物館所蔵

同じページ(図7)の上部には、さらに、「WONOGA TAKE, JAPAN」とキャプションが付された図20の山岳風景の挿絵がある。かたや、図21はそれに該当する『日本』の挿絵だ。『グリーンズ絵入り新聞』の記事の本文中に、「この山は Mia 湾から北西の方角、23リーグ(約69マイル)のところに位置する」と記されているが、現時点で挿絵の出典は特定できていない¹⁹⁾。ただし、『日本』の図版には他にさまざまな山岳風景や名所が挿絵として収められており、その多くは『名山図譜』などの古典籍によることが指摘されてきた²⁰⁾。ゆえに、この挿絵の典拠も日本の書籍や画集などに求められるかもしれない。

7 むすび

いうまでもなくこれらの記事は絵入り新聞という当時のアメリカのメディアに掲載されたものである。購読層というものは、もちろん存在していたのであろうが、対象は不特定多数の読者である。新聞を編集し発行する側、つまり情報を提供する側は、一般に読者の興味から逸脱したような記事は掲載しない。当然のことだが、いかに読まれるかといった記事の編集に全力を傾注する。したがって、両紙の日本関係記事の内容を分析することによって、1850年代におけるアメリカ大衆の「日本観」の一端がよみとれると考えられる。

さらに、日本という未知なる異文化をテーマとした記事であるならば、提供された情報その



図17「東海道 瀬田川と瀬田橋の景」シーボルト著『日本』、雄松堂書店刊

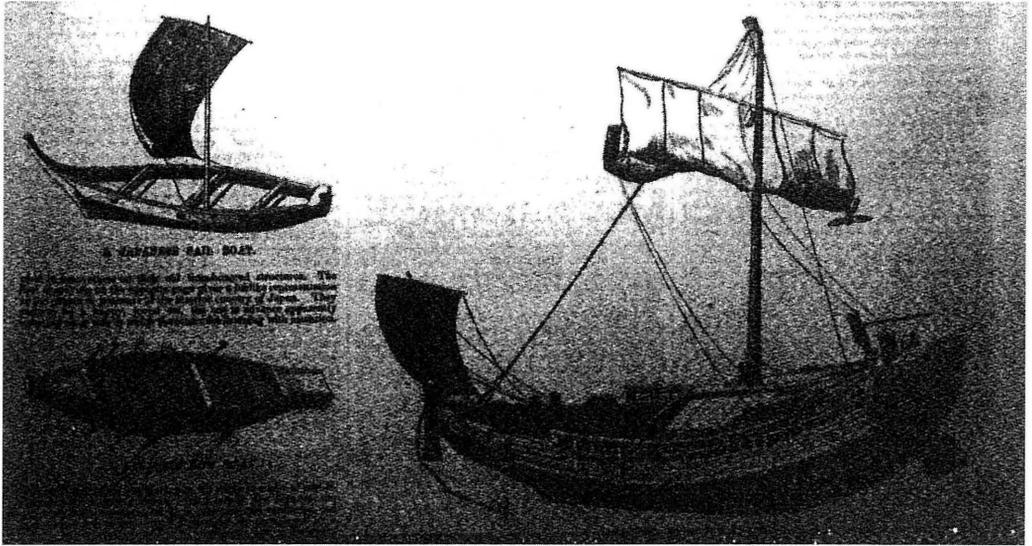


図18 「A JAPANESE COASTING VESSEL」『グリーンズン絵入り新聞』
1854年 9月16日 ピーボディー・エセックス博物館所蔵

ものによって、アメリカの読者に対しある種の日本イメージが形成されてゆく。知られざる日本についての新たな知見が得られる一方、記事いかんによっては荒唐無稽な日本像も登場する。それは、現代のアメリカ人たちがもつ日本への、いわゆるステレオタイプ化されたイメージの源流とさえ思われるところもあるのである。

15世紀以来、ヨーロッパでは大航海時代が到来し、多くの人びとが「未知なる地」を求め地球の「果て」へと船出した。「未知なる地」とは、「未開なる地=非・文明の地」をも意味し、彼らの探検は地図上の「空白地帯」を埋め、キリスト教を布教し、植民地経営というシステムにくみこむことによって、つまりはその時代のヨーロッパ的秩序をうちたてようとすることを意味した。鎖国体制のもと、「神秘のベール」につつまれた「日出づる国」を開国へと促したアメリカによる日本への「遠征」も、こうしたコンセプトに連なるものであった。

これまで見てきたように、司令官の任にあったペリーは日本の情報をえるため、長崎出島のオランダ商館員たちの記録を入念に調べあげていた。とりわけシーボルトの日本に関する総合的研究がこのうえない宝庫とされ、この「長崎発→ヨーロッパ経由→米国着」ルートに負うところは多々あったと認められるのである。それは同時に絵入り新聞というメディアを通じて、さらに姿を変えてアメリカの大衆へと伝えられていった。

このようにして掲載された日本に関する記事や挿絵のニュースソースを探り、成立過程を究めるといことは、日米関係の黎明期における異文化イメージの形成について、その社会的な意義が十分にあると考えられる。21世紀を迎えるにあたり、両者が新たな関係を構築して行こうとするならば、それはなおさらのことのように思えるのである。

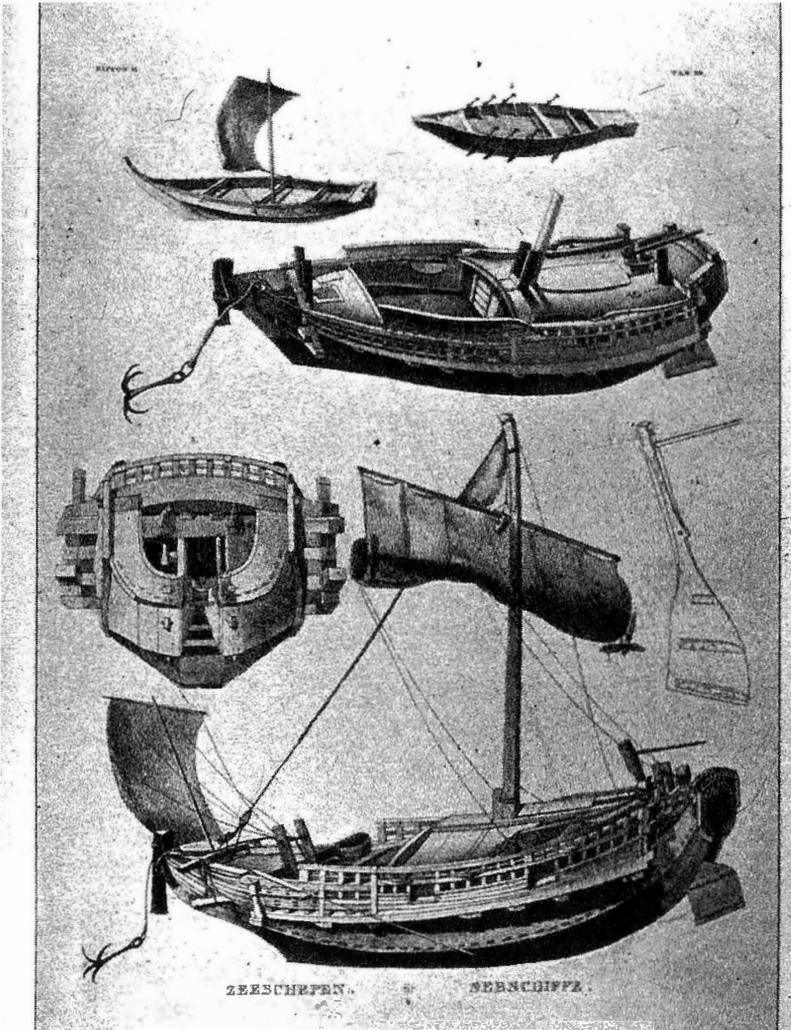


図19「和船」シーボルト著『日本』、雄松堂書店刊

ところで、冒頭に紹介した大仏の挿絵について、あの絵の原画はいまだ不明である。まさか、日本遠征隊の専属画家ハイネが持ち帰ったとは思えないのだが。しかし、『グリーンズン絵入り新聞』や『バロウ絵入り新聞』の日本関係記事のなかには、オランダ商館長ティツィングの『日本風俗誌』や、また本稿で紹介したもの以外にもシーボルトの『日本』から引用のうえりライトし、挿絵などはそのまま写しとって掲載したものが、ほかに多数あることが確認できた。なかには、シーボルトの妻の其扇^{そのぎ}や、オランダ通詞の石橋助左衛門も登場する。それらの記事についての考察は、稿を改め次の機会としたい。



図20 「WONOGATAKE JAPAN」『グリーンズン絵入り新聞』
1854年9月16日 ピーボディー・エセックス博物館所蔵

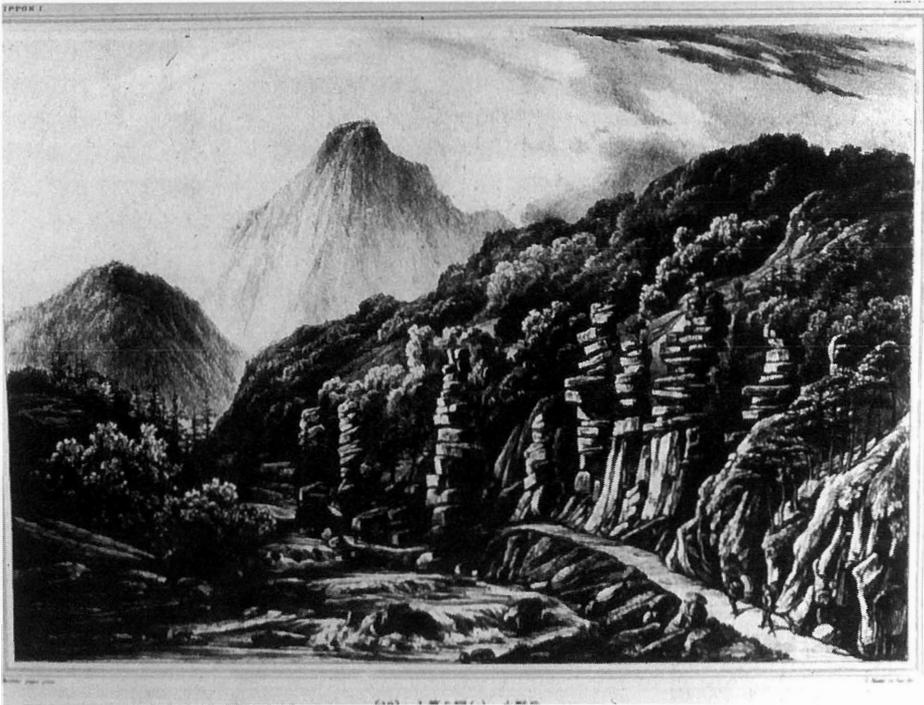


図21 「小野岳」シーボルト著『日本』、雄松堂書店刊

[註]

- 1) *Ballou's Pictorial*, Vol.10, No.18, May 3, 1856.
- 2) *Narrative of the Expedition of an American Squadron to China Seas and Japan, in the year of 1852, 53 and 1854*. 1856. Senate Printer.
- 3) 『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. I』栄光教育文化研究所、1997年、4頁。
- 4) 『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. I』栄光教育文化研究所、1997年、4頁。
- 5) 呉秀三『シーボルト先生 その生涯及び功業 第2巻』平凡社、1994年、49頁。
- 6) 『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. I』栄光教育文化研究所、1997年、71頁。
- 7) 宮坂正英「シーボルトとペリーのアメリカ日本遠征艦隊」(箭内健次・宮崎道生編『シーボルトと日本の開国 近代化』続群書類従完成会、1997年、215頁。宮坂正英氏は、ブランデンシュタイン・ツェッペリン家文書を長年にわたり調査研究され、ハイネやテラーを介したペリー艦隊とシーボルトとの接触を明らかにした。シーボルトとロシアの関係における同氏の見解も注目される。
- 8) 『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. I』栄光教育文化研究所、1997年、4頁。
- 9) *Gleason's Pictorial*, Vol.4, No.7, Feb 12, 1853.
- 10) 『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. I』栄光教育文化研究所、1997年、3頁。
- 11) シーボルト (中井晶夫訳)『日本 第1巻』、雄松堂書店、1977年、46-47頁。
- 12) シーボルト (中井晶夫・八代圀衛訳)『日本 図録第1巻』雄松堂書店、1978年、5頁。
- 13) シーボルト (中井晶夫・八代圀衛訳)『日本 図録第1巻』雄松堂書店、1978年、5頁。
- 14) シーボルト (中井晶夫・八代圀衛訳)『日本 図録第1巻』雄松堂書店、1978年、7頁。
- 15) 東京都江戸東京博物館・財団法人東洋文庫編「世界のなかの江戸・日本」東京都江戸東京博物館・財団法人東洋文庫、1994年、8頁。
- 16) ジーボルト (斎藤信訳)『江戸参府紀行』平凡社、1989年、12頁。
- 17) 小林淳一「川原慶賀筆『人物画帳』—シーボルトのくまなごしとともに」(ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパン』)日本放送出版協会、1998年、237-260頁。
- 18) 1996年に林原美術館(岡山)、江戸東京博物館(東京)、国立民族学博物館(大阪)にてシーボルト生誕200年を記念した「シーボルト父子のみた日本」展が順次開催された。筆者をふくめ展覧会を担当した5人の研究者が、その準備の一環で、前年にライデン、ミュンヘン、ウィーンの各博物館・美術館にてシーボルト・コレクションの資料調査を実施した。その際、ミュンヘン国立民族学博物館にて川原慶賀筆『人物画帳』の所在を確認した。109枚の絵には最初から最後までをとおして手書きの番号が、また本紙や台紙にはそれぞれにオランダ語、ローマ字表記による日本語、ドイツ語の説明書きが記されている。
- 19) シーボルト (中井晶夫・八代圀衛訳)『日本 図録第1巻』雄松堂書店、1978年。この図版の翻訳には「小野岳」とある。
- 20) 斎藤信「シーボルト『日本』の図録について」(シーボルト『日本 図録第1巻』)雄松堂書店、1978年。

[付記]

ピーボディー・エセックス博物館における筆者の調査研究については、国際交流基金から「フェローシップ派遣事業(1997年度)」の助成を受けることができた。記して謝意を表する。